

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別郵便承認第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成二十一年六月一日発行(第四百十二巻第六号)

ホトトギス

六月号



俳句随想 〔三百二十四〕

汀子

高浜虚子没後五十年を記念して「近代俳句の夜明け―子規から虚子へ―展」が横浜の神奈川県立近代文学館で開催されている。芦屋の虚子記念文学館がオープンした最初から続けて特別展示をしてきたテーマ「近代俳句の夜明け」の資料、その他あらゆる資料がここで一般公開され、その間、講演会・シンポジウム等のイベントも好評の中で順調に推移している。熱心な参加者に心から感謝を申し上げたい。桜の開花が始まる頃のイベントは大入り満員になった。講演者、シンポジスト、コーディネーター、聴衆の方々等々に埋まった会場の熱気に溢れた雰囲気は素晴らしかった。三月六日、関係者によってテープカットの後、内覧会があり、次の日七日の私の「虚子俳句の変遷」と題した講演会、二十日のシンポジウム「花鳥諷詠」が済んだ。何れも熱心に参加して下さる方々によって意義深いものとなった。又、展示を熱心に見て下さる方々も多く嬉しく思っている。

四月十九日まで開催されている。あとホトトギスの「句会と講演の会」がこの文学館で開催される。講演は小沢昭一氏。四月四日のシンポジウムは「虚子の客観写生」。四月十八日は「虚子十句」を取り上げる。

旬日記 汀子

平成二十年六月一日 たつの市民俳句大会

迂回路も空いてある道風薫る
快晴をたたへ暑さを口にせず

六月二日 ロイヤル俳優

遠出とも思ひて早寝明易し
あぢさゐに雨の近づきつゝありぬ

雨蛙とは保護色に走り梅雨
快晴の昨日の遠し目が見えぬ

六月六日 工業倶楽部

短夜や家居楽しむ夜更かしも
地震の地に残る橋の名業平忌

麦の秋帰りは刈られありし田も
住み古りて馴染む橋の名業平忌

六月七日 芦屋ホトトギス会

丹波路の雨の花の香葉る旅
紫陽花の栗の変幻日の変化

六月八日 祝飯島秀雄様御息

天も地もこのよき日祝ぎ風薫る
六月八日 関西野分会

かがんぼに脚の未練のなかりけり
飾られて競ふも加茂のくらべ馬

六月八日 下萌句会

短夜の明日の旅路のととのへり
蝸牛にも逃げ足のあることを

邂逅のさくらん坊でありしかな
蝸牛庭の春秋知つてをり

六月九日 贈アキノ前フリピン大統領

薫風に包まれてゆく祈りかな
六月十日 大阪倶楽部

守備範囲 蝸牛虎にある朝
玉葱の崩れてスーブ炊き上る

隠し味とは玉葱のことなりし
現はるる 蝸牛虎を待つことも

根づきたる芝の草取はじまりぬ
六月十日 綿業倶楽部

花みかん句 家路となつてをり
庭の蚊に待たれてをりしこと確か

六月十二日 清交社

薫風に托す 祈りでありしこと
十葉の句 夕べや雨上り

稿一の息を大きく薫風に
一日にも三つ約束 風薫る

水馬にも飛ぶ力あることを
六月十七日 有恒俳句会

包まるるみどりの狭庭稿を継ぐ
暑さより湿気外にしてゐる外出

夏手套はぬき外に出るとのへり
鈴蘭の旅路 通けくありしかな

六月十七日 無名会

青芝の引立ててゐる狭庭かな
山荘の火取虫には名残あり

快晴といふは暑さも苦にならず
つづけるといふも力や五月晴

星見えることも梅雨晴なりしかな
山荘の玻璃戸は火取虫のもの

六月十八日 夏潮句会

夏草の名草 醜草 何れとも
一枚のみどりの葉揺れやまざりし

水欲しき風知草には水漬くほど
計画は密に密にと明易し

総会も済み短夜の旅となる
六月二十一日 北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

恒例の梅雨逃れざる旅承知
梅雨雲と水平線にある隙間

出水かのも又紛れぬ円山川水位
あぢさゐの又紛れたるカーブかな

六月二十六日 きららぎ会

次の色 その次の色 七変化
スケジュール 通りに運ぶ蝸牛

六月二十七日 時雨会

梅雨雲を抜ける緊張空の旅
川蟹の行方定かでなかりけり

走り抜け負馬の息をさまらざ
裏庭の色を集めて金魚草

飾られて加茂を沸かせし競べ馬
負馬も勝馬も出て行ける門

六月二十九日 野分会

ががんぼを閉ぢ込めて雨つゆり来し
負馬も曳かば聞かば聞かば聞かば

競べ馬古式継ぎゆく加茂の森
六月三十日 春菜会同窓会

梅雨上りゆける都心の仕事部屋
梅雨雨の雲切れ都心青空に

過去未来つなぐ道行く五月晴
ふり返る人生もあり友の夏

青春をいざ語らばや旅の夏
一枚のみどりの葉揺れやまざりし

水欲しき風知草には水漬くほど
計画は密に密にと明易し

総会も済み短夜の旅となる
六月二十一日 北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

恒例の梅雨逃れざる旅承知
梅雨雲と水平線にある隙間

出水かのも又紛れぬ円山川水位
あぢさゐの又紛れたるカーブかな

六月二十六日 きららぎ会

次の色 その次の色 七変化
スケジュール 通りに運ぶ蝸牛

六月二十七日 時雨会

梅雨雲を抜ける緊張空の旅
川蟹の行方定かでなかりけり

走り抜け負馬の息をさまらざ
裏庭の色を集めて金魚草

飾られて加茂を沸かせし競べ馬
負馬も勝馬も出て行ける門

六月二十九日 野分会

ががんぼを閉ぢ込めて雨つゆり来し
負馬も曳かば聞かば聞かば聞かば

競べ馬古式継ぎゆく加茂の森
六月三十日 春菜会同窓会

梅雨上りゆける都心の仕事部屋
梅雨雨の雲切れ都心青空に

過去未来つなぐ道行く五月晴
ふり返る人生もあり友の夏

青春をいざ語らばや旅の夏
一枚のみどりの葉揺れやまざりし

水欲しき風知草には水漬くほど
計画は密に密にと明易し

総会も済み短夜の旅となる
六月二十一日 北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

恒例の梅雨逃れざる旅承知
梅雨雲と水平線にある隙間

出水かのも又紛れぬ円山川水位
あぢさゐの又紛れたるカーブかな

六月二十六日 きららぎ会

次の色 その次の色 七変化
スケジュール 通りに運ぶ蝸牛

六月二十七日 時雨会

梅雨雲を抜ける緊張空の旅
川蟹の行方定かでなかりけり

走り抜け負馬の息をさまらざ
裏庭の色を集めて金魚草

飾られて加茂を沸かせし競べ馬
負馬も勝馬も出て行ける門

六月二十九日 野分会

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年六月二日 はせを句会

明易や花鳥諷詠塾の句座
先頭はモーセに非ず蟻の道

六月四日 一水会

潮騒を枕辺に聞き明易し
徽の香に緋くヨハネ福音書

六月五日 蕉心会

蕉像の眼虚ろや梅雨に入る
タイガース南風も味方して勝利
五月雨を待つ大川の水位かな
葉桜や芭蕉通りと名を変へて
黒南風に水面踊つてをりにけり
ねえあなた私の袖の蟻取つて
蕉像を洗ひ上げたる五月雨
箱庭もビルの一部でありにけり
六月七日 あうたう句会
神杉といふ万緑の守る古刹
さくらんぼ去年は君の唇に
皐月富士八十二個の目が霽らす
六月九日 朝日カルチャー若草句会
点々と白鷺沈め万緑裡
万緑を配して鏡板の黙
曇天に微笑み返し花菖蒲
武田菱四方万緑に囲まれて

六月十二日 土筆会

境内を結界として羽抜鶏
闇を濃くして十葉の咲きにけり
暑き日を暑き時間を持て余す
甲子園暑き六甲おろしかな
黄と白は文を競はず花菖蒲

六月十四日 日本伝統俳句協会通常総会

五月晴連れて受賞者集ひけり
六月十四日 日本伝統俳句協会通常総会後二次句会

めまひせし第一席の君の汗
二の腕に涼しく目眩覚えけり
六月十七日 草木瓜会

夏至使ひ切つたる主婦の手練かな
天を恋ふほどに南天咲きにけり
南天の花楚々といふ主張かな
夏至暮れてビルの狭間といふ真闇
六月十九日 登高会

古藤椅子虚子の梯凹ませて
藤椅子に座る彼の目を近づけて
藤椅子や柱の疵も古りにけり
万緑の奥の万緑人拒み

六月二十日 六甲会

丸の内街路樹といふ木下闇
俳磚の千基下闇寄せつけず
木下闇シンボルツリーてふ威厳
子の手より子の手に渡る雨蛙
青蛙草に現れ草に消ゆ
六月二十二日 北近畿ホトギス俳句大会

万緑にちよつとスピード落とさへん
梅雨霧の霽れてロシアはあの向かう
夏帽子黒で乙姫めける君
梅雨晴の帯となりたる水平線
梅雨出水水惑星といふ運命
六月二十三日 角川「俳句」八月号出句

万緑を映すあなれたの瞳かな
噴水のオアシスめたる丸の内
丸の内ビジネスマンの昼寝時
ツーショット涼しき距離でありにけり
夏服の肩触れ合ひて撮られけり
六月二十四日 若水句会

磯蟹や景勝の地を知り尽くし
大都市のビル凹ませて梅雨に入る
風染めて未央柳の蕊揺るる
磯蟹に日本海の凧いでをり
入梅に単線といふ脆さかな
六月二十五日 目黒学園句会

五月雨を集めて句碑の文字歪む
木下闇恩賜公園てふ威厳
蟻の道昨日と違ふ曲り角
五月雨や大川の嵩只ならず
下闇にビル沈みゆく丸の内
潦大海として蟻の道
六月二十七日 「河内野」関東大会

河内野を発つ五月晴伴ひて
河内より涼しき笑顔もて江戸へ
六月二十八日 ホトトギス社句会
夕河岸や虚子のあしあと辿り来て

雑詠

廣太郎 選

白鳥の来れば多過ぎかと思ふ 熱海 嶋田一歩

浮びぬるスワンに重さなかりけり 同 同

白鳥にとんびはとんでばかりぬる 同 同

城といふ大きな寒さ立つてをり 八尾 岩垣子鹿

初春の鈴に呼出す猿田彦 同 同

恐竜の出でし土より露の臺 同 同

狐火の二つがとぼり三つ消え 神戸 山田弘子

かの島の海を抱きぬる竜の玉 同 同

寒卵こつんとたつた一人の音 同 同

正月の放送はやも早とちり 京都 安原 葉

鳴きぬるは昼見し木兔か山の寺 同 同

木兔鳴いて山寺らしくなりにけり 同 同

廃村の黄葉の山の 大月夜 たつの 浅井青陽子

闘志にも似て大寒の野路辿る 同 同

三木清 濁れし池や 寒桜 同 同

有るだけのおもちや浮かべて初湯かな 神戸 立村霜衣

風絡むままにマフラー掛けてあり 同 同

寒紅や風に乱れし髪も艶 同 同

買初は十国峠だんごなる 熱海 嶋田摩耶子

二ん月はすぐに三月庭仕事 同 同

梅まつり飲まされて買ふ梅茶かな 同 同

豆を撒く鬼門の闇に力こめ 八尾 山下美典

露の臺すでに露の香ただよはず 同 同

梅林の径尽き風の音ばかり 同 同

青空になりゆく早さ春隣 神戸 藤井啓子

一斉にページ繰る音大試験 同 同

退学の子よりの手紙春寒し 同 同

風花に原爆ドームかくれなし 福山 竹下陶子

喧嘩独楽闘志は巻きし紐にあり 同 同

勝独楽のまどかに回り終りたる 同 同

倒れんとある枯菊に支へして 福岡 松尾緑富

枯菊の支へ直して切らずあり 同 同

枯菊を切らんと思ひ日数経し 同 同

旧正の富士を車窓に東上す 東京 大久保白村

旧正の花鳥諷詠塾に酌む 同 同

旧正や酒も醬油も甘口に 同 同

毒舌に返す毒舌初笑 香川 湯川 雅

飛石を冬日向へと跳んで入る 同 同

靴音の心音となる寒の寺 同 同

凍土の般若めきたるひところ 渡川 木暮陶句郎

乾杯の音はラの音春隣 同 同

早春のタイブレードをくりかへす 同 同

雑詠句評（五月号より）

日本に富士あり小六月のあり 福山 竹下 陶子

何と明るく晴れやかな句だろうか。小六月の明るさあたたかさ
に包まれている富士山である。青空にくつきりと大きく姿を見せ
ている富士山に出会って、思わず「日本に富士あり」という言葉
が出たのである。ベテランにして、この率直さ。感動が真っ直ぐ
に伝わってくる。

晴れやかな富士山を目の当りにした作者は、思わず「富士あり
小六月のあり」と繰り返した。そうすることによって、感動がよ
り大きくなめらかに伝わってくる。のびやかで心弾むこの詠語
は、年齢をものともしない作者の若々しさをよく伝えている。い
つも前向きに生きる作者ならではの作品である。（中正）

日本の誇るべき風景が目の当たりに見える句である。筆者が関
東で生活をするようになり、富士山は身近になったと言えるかも
知れないが、季節や天候により、頻繁に全景が見えるというわけ
ではないが、この季節の時期は最も美しく見えるのだろう。富士
という視覚と季節の触覚が絶妙である。（廣太郎）

（以下略）

マスクして悩むが如き眉目かな 榎原 稲岡 長

冬期は冷たい空気や病菌、塵埃などを防いだり、寒さや乾燥か
ら喉や鼻を守るためなどによくマスクを掛けるが、マスクは鼻と
口を覆うので眉や目が表情を左右する場合が多い。この句はその
眉目が、悩んでいるような表情であるという。悩みは人間の心の
もつ根源的な特徴の一つであることを思うと、この句はいかにも
人間らしい句と言えるのかも知れない。（葉）

冬になると「マスク」をしている人をよく見掛ける。実際風邪
を引いている人や、外から風邪の菌を貰わない為予防が目的の人
もいるようだ。何れにせよ大きなマスクは目の下から顔をすっぽ
り覆い、なかなか表情が判らないが、眉目に注目した事により生
気が感じられる。（廣太郎）

天地有情

女子選

スキーする山のつづきに火噴く山
モスクワの友より投句今雪と
手のひらに残る手すりのつめたさよ
春の風邪快くなつたやらならぬやら
一列車遅れしことに時雨虹
時雨虹立ちし辺りを通過中
人參の彩が躍つてをりし鍋
抜きたての人參といふ大地の香
御慶まだ申し遅れてをりにけり
永き日のこの庭に来て癒さるる
病床に俳句も鬪志老の春
病室に帰る時刻来ふぐと汁
このあたり梅咲く庭の堀低く
鶯笛どうにか吹けしそれを買ふ
ためらひもなく絵踏せし女はも
返返る路を靴音固く行く
ひと節をうたひ切れざる初音かな
昭和の日草むすかばねにもなれず

東村山 村松紅花
同 同
東京 田村 元
同 同
京都 安原 葉
同 同
東京 稲畑廣太郎
同 同
明石 中杉隆世
同 同
熱海 嶋田一步
同 同
同 嶋田摩耶子
同 同
榎原 稲岡 長
同 同
福山 竹下陶子
同 同

早春の中辺路またも憶ひ出に
雛流先づ手はじめの薫仕事
何故かくも貴き春の一と日かな
白眼鏡あら面白の小鳥たち
虚子愛でし平凡な赤冬椿
石橋を渡れば春の来てをりぬ
一門に慶事も過客年惜む
白鳥の視線に歩み寄れぬ距離
夜明けすぐそこなる凍の底ならむ
改めて虚子学ぶ日を初暦
書初や六甲の水寧楽の墨
稿起すまでの寒さでありにけり
一山がすなはち寺領木の実植う
いかなごの旬の近づく鍋洗ふ
豆撒や鬼のかなしみ残る鬮
せせらぎに聴く山国の早春譜
投扇興見せて頂きたることも
投煽興句座を手早く片付けて

たつの 浅井青陽子
同 同
豊中 瀧 青佳
同 同
東京 今井千鶴子
同 同
金沢 藤浦昭代
同 同
東京 河野美奇
同 同
神戸 山田弘子
同 同
同 三村純也
同 同
同 長山あや
同 同
福岡 松尾緑富
同 同

天地有情句評

汀子

人參の彩が躍つてをりし鍋 東京 稲畑廣太郎

人參の大きき彩が炊けてゆく現実。

御慶まだ申し遅れてをりにけり 明石 中杉隆世

御慶を交わす機を逃している心の推移。

病床に俳句も闘志老の春 熱海 嶋田一步

病と闘うときの心の健康。

このあたり梅咲く庭の堀低く 熱海 嶋田摩耶子

梅が咲けば庭に結界が無くなる。

ためらひもなく絵踏せし女はも 樺原 稲岡 長

心の奥深くにある女の働実。

(以下略)

うされた。心より御冥福をお祈りして。

活火山のつづきにあるスキー山。作者は思い出を抱き長寿を全

スキーする山のつづきに火噴く山 東村山 村松紅花

手のひらに残る手すりのつめたさよ 東京 田村 元

手すりを握って外の階段を登った実感。

一列車遅れしことに時雨虹 京都 安原 葉

あせる心を癒す時雨虹。